

広報大洲

きらめき創造 大洲市  
—みとめあい ささえあう 肱川流域都市—

2012  
No.95

12

# 大洲



好奇心いっぱいの科学体験

# がんばる大洲っ子

今月の題字作成者

大洲南中学校2年（現：大洲南中学校3年）

松本博幸さん



僕は将来、消防士か学校の先生になりたいと思っています。そのきっかけとなったのは、中学校2年生での職場体験や、日々優しく接してくれる南中学校の先生の存在です。これから、人の役に立てるように成長していきたいと思っています。

南中学校での一番の思い出は、ベスト8まで勝ち進んだ野球の県総体です。負けた時は悔しかったけれど、良い経験ができました。

南中学校での生活も最後になるので、楽しく過ごしてきた友達といっぱい思い出をつくりたいです。

僕は「努力は人を裏切らない」を信念に、何事も一生懸命に取り組むようにしています。今までに経験してきた楽しいことや辛いことを、これから進む道で生かしていきたいです。

## 12月の納税など

納期限は12月25日(火)です

税別	12月	1月	2月	3月
市県民税	4期		5期	
固定資産税		5期		
軽自動車税				
国民健康保険税	6期	7期	8期	9期

市税などの納付は、便利で安心な「口座振替」を！

## 現在の大洲

人の動き(先月比)		交通事故(昨年同期)	
人口	47,527人 (+11)	件数	146件(167件)
男	22,573人 (+2)	死者	1人(2人)
女	24,954人 (+9)	負傷者	174人(205人)
世帯数	20,280世帯(+26)		

(2012年10月末現在)

## CONTENTS 目次

2ページ	がんばる大洲っ子・今月の表紙
3ページ～	大洲「もの」づくりの現場から(特集)
10ページ～	シリーズ
13ページ	おおずニュース
14ページ	まちのわだい
15ページ～	おしらせ
25ページ～	図書館・保健センター・心と体の健康ガイド
28ページ	がんばるひと(櫛友会)

## 今月の表紙

picture 写真



10月27日(土)、国立大洲青少年交流の家で行われた「科学体験フェスティバル」を取材しました。

どのブースも人気があり、子どもたちは普段経験できない科学の面白さに触れていました。

子どもだけではなく、同行した保護者も目を輝かせていました。

# 大洲「ものづくり」の現場から



私たちのまち・大洲では、古来からさまざまな「もの」が作られ、文化として根付いてきました。

しかし、ものづくり（産業）は、社会情勢の移り変わりの中で、その姿を変えていきます。隆盛を迎えるもの、衰退の一途をたどるもの、復活を果たすもの。

藩政時代から、質の高さを誇っていた手すき和紙である「大洲和紙」は、機械すきに押され、その生産数は減少していきました。現在、「大洲和紙」は、内子町五十崎で生産されています。

また、大洲喜多地方は「伊予生糸」発祥の地であり、最盛期の大正2年には18の工場がありました。しかし、その後、徐々に衰退し、平成6年には「伊予生糸」の長い歴史を誇った県蚕糸連大洲工場が閉鎖されました。

今、手作りで行う「ものづくり」は、厳しい現実と直面しています。安く大量に生産された品々や輸入品の増加、個人の嗜好の多様化などから、伝統的な手法で作られた「もの」が次第にその姿を消そうとしています。

そのような中で、厳しい現実、時代の逆風と向き合いながら、脈々と職人の技を受け継ぐ人たちがいます。

また、衰退していく大洲の伝統工芸を復活させようと、豊かな発想力で、伝統工芸品の活用方法を研究している団体があります。

## 大洲の原点「ものづくり」

今月号では、ものづくりの現場から、大洲の伝統工芸の「今」を取材しました。



# 銅板から学び、銅板と会話する

「空打ちによる鬼飾りづくり」

有限会社久保板金工業所 久保 賀運よしかずさん



6

「生涯現役です」と話すのは、建設板金工の久保賀運さん。15歳でこの道に入り、以来60年以上の経験を持ちます。その卓越した技術と長年の功績により、平成15年には「現代の名工」に選ばれ、さらに平成18年には「黄綬褒章」を受章されています。

また、神社仏閣の銅板屋根工事や修理などに精通していて、全国でも珍しい鬼飾り職人です。鬼瓦や鬼飾りを手がける職人は「鬼師」と呼ばれ、昔から人々に敬われてきました。

賀運さんは、仕事の中で屋根の銅板葺きや鬼瓦の研究を続け、さまざまな技法を生み出してきました。特に、鬼飾りの耐久性を飛躍的に向上させた「空打ち」は、日本で唯一の技法で、全国的にも高い評価を得ています。

「空打ち」とは、鬼飾りの中の心木に銅板を張る従来の技法とは異なり、銅板のみを使い金槌で打ち出して形作り、鬼飾りを作る技法です。心木が腐り、鬼飾りが痛むという問題を解決しました。

「今、鬼飾りを作る職人はほとんどいません。『空打ち』に限って言えば、日本でも私一人ではないかと思っています」

賀運さんは、四国霊場八十八ヶ所をはじめ、県内外の神社仏閣の修理に携わってきました。その数は、現在では100件を超えるま



8



9



10



1



2



3

- 1 材料となる銅板
- 2 賀運さんの作業場。完成した鬼飾りが、所狭しと並べられていた
- 3 4 5 神社などに納められるのを待つ鬼飾りの数々
- 6 金槌を使い、黙々と作業を進める賀運さん
- 7 8 9 10 作品の数々(7屋根飾り 8壺 9ハスの花 10しめ縄)

今でも日本一の職人を目指し、芸術性の高い作品を作り続ける賀運さん。名工の作業場では、金槌を叩く音が今も昔と変わらず、毎日響いています。

鬼飾り以外にも、壺やしちまほこなど、賀運さんはさまざまな作品を生み出していて、一度見たものは、ほとんどのものを銅板で作ることができそうです。

その卓越した技術の継承について伺ってみると、「後継者はいない。『空打ち』の技術も、私の代で途切れるかもしれません」と、静かな口調で話されました。

「震災の様子をテレビで見ても、何か自分に役に立てることはないかと考えました。そこで被害が大きかった生田神社を訪ね、私に鬼飾りを作らせてもらえないか、お話ししました。自分の出来る限りの技術と思いを込め、完成した鬼瓦5つを無償で生田神社に寄贈しました。喜んでいただいた関係者の姿が、今でも目に焼きついて離れません」

でなくなっています。

その中でも、特に印象に残っているのは、平成7年に起きた阪神淡路大震災で、生田神社の震災復興事業に参加した時のことだそうです。その時の心境を、こう語ります。



4



5

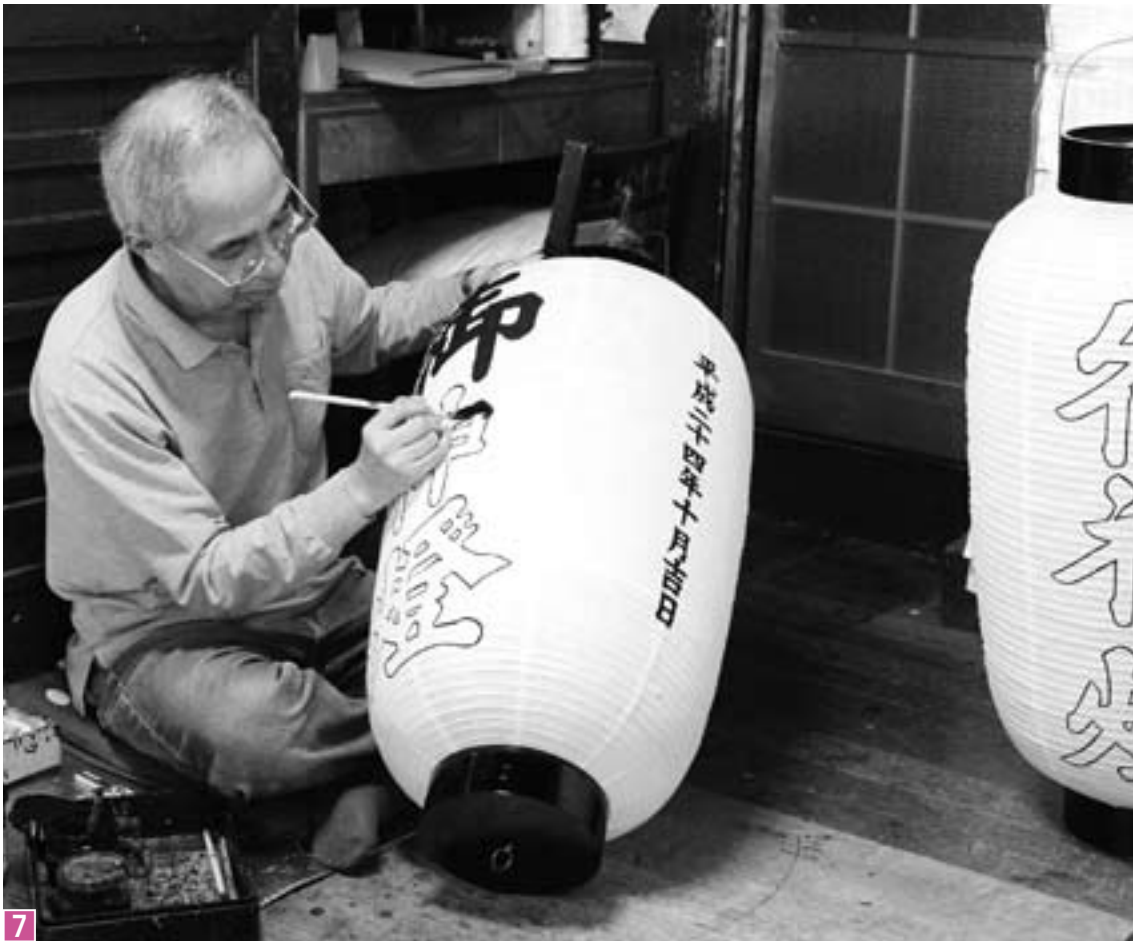


7

# 一文字一文字に思いを込めて

～愛媛県の伝統的工芸品 高張提灯～

ひらち屋提灯製作所 梶尾 盛俊もりとしさん



7



8



9

「高張提灯」とは、江戸時代初期に使われていた照明器具で、現在、お祭りなど祭事に用いられています。

戦後までは、提灯を製造する業者は多数存在していましたが、時代の流れとともに減少し、現在、南予地方では一軒のみとなっています。

その店舗が大洲市内にある「ひらち屋提灯製作所」。

創業200年余、7代目となる梶尾盛俊さんに話を伺いました。

「元々は、両親が高齢のため東京から戻ってきました」と話す盛俊さん。大洲に戻ってからは先代の手ほどきを受け、今では先代の意思を継ぎ、伝統工芸の世界に身を投じることになりました。

提灯作りは、全行程を奥さんのかおる薫さんと、すべて手作業で仕上げます。

作業は、まず組み立てた木枠に竹ひごを円形に巻き付けていきます。ひごとひごを和紙でつないだ後、「内側」という部品を取り付け、糸で固定します。その後、五十崎和紙を貼りつけます。

そして、固定していた木枠と型を取り外し、提灯を折りたたんでいきます。再び広げられた提灯に墨入れをし、仕上げに防水・保護のために「エゴマ油」を塗り、2〜3日天日干しして完成となります。提灯の仕上げまでには、約1週間かかるそうです。



1



2



4



3



5



6

1 2 材料となる竹ひごと、提灯の上下に飾り付ける、「がわ」

3 数メートルにもなる竹ひごを、段差なく繋ぎながら木枠に巻き付け、糸で固定していく

4 和紙を張り終え、木枠と型を外した状態の提灯

5 墨入れ前に、一度折りたたまれた提灯。折りたたむ前に墨入れする業者もいるが、伸縮により文字が小さくなることもある

6 文字が書かれ墨入れを待つ提灯

7 提灯に墨入れをする、梶尾盛俊さん

8 天日干しされる提灯の数々

9 店頭飾られる高張提灯

全行程の中で最も気を遣うのが、「文字書き」と「紋書き」の作業とのこと。そのことを尋ねると、盛俊さんは「先代が書き残してくれた書体は、くずし文字など数種類あり、どれも素晴らしいものです。先代から手ほどきを受けて書き方を覚えた文字もあれば、見よう見まねで覚えたものもあります。提灯の納入先からは、先代からの書体が好評で、愛媛県の伝統工芸士であった父（6代目、梶尾善作）の名に恥じない仕事をしていきたいと思っています。今後は、新たな書体にも挑戦し、次のステップに繋げていきたいと考えています」と話してくださいました。

最近、よく見かけるようになったビニール製の提灯との違いについても伺ってみました。

「手作りの提灯には、既製品にはない文字の書体の美しさと深い味わいがあります。また、防水・保護のために、表面に「エゴマ油」を塗ると、和紙が茶色っぽい色になり、灯りに風情が出ます。昔ながらの『ものづくり』を大切に、次世代に引き継いでいきたいものです」

秋祭りなどで、家の軒先に提灯を飾る家は少なくなり、昔ながらの風習が失われつつあります。

盛俊さんはこう話します。

「手作りの提灯を見て、古き良き時代を感じてほしい」

7代目の挑戦は、これからも続きます。

# 大洲和紙の復活に向けて

大洲農業高等学校生活科学科被服班の取り組み

大洲の伝統工芸を守る人、その技を受け継いでいく人。それらの人たちは別の形で、伝統工芸品と向き合う団体があります。

大洲農業高等学校生活科学科被服班は、衰退していく大洲の伝統工芸・産業を継承および復活させる取り組みを実践しようとしています。

高校生ならではの若い発想力によって、伝統工芸品に新たな付加価値をつけたり、活用方法を研究することで、多くのみなさんに「大洲の魅力」を伝えていこうと取り組んでいます。

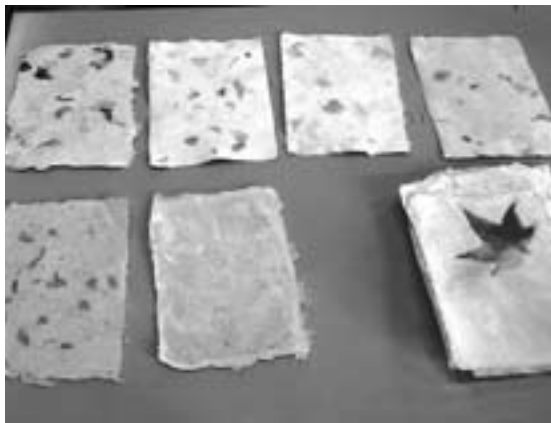


大洲藩時代、日本一良質と評判だった「大洲半紙」。現在、衰退と継承の危機にある「大洲和紙」に着目し、研究を進めています。

歴史をひもときながら当時の材料や製造方法を調査し、伝統工芸士の指導を受け、自らが和紙をすくことで「大洲和紙」の魅力を感じ、その復活を目指しています。

その取り組みは、「大洲和紙」の製造だけでなく、さまざまな活用方法を研究するまでに広がりを見せています。

大洲和紙の復活に向けた、大洲農業高等学校生活科学科被服班の取り組みをご紹介します。



## 大洲和紙

大洲半紙（明治以降「大洲和紙」）は、藩政時代から品質に優れ、特に江戸で好評だった。大洲半紙は、内ノ子・大瀬（現内子町など）で多く生産され、宝暦年間には、かじ役所や紙役所を藩が設けて専売としていた。

明治5年に大洲半紙の専売が廃止となり、民営化が実現し世相から喜ばれたが、製品売りさばきの道筋に迷ったり、粗悪な原料を使って業者に紙をすかせたものを「大洲和紙」として売り出されたりしたため、藩政時代に日本一の良質をうたわれた「大洲半紙」も、品質低下の悪評が流れた。

また、外国からの洋紙の輸入もあり、和紙の利用が減少し、大洲和紙の生産は衰退していくことになった。

現在は、大正時代に創業した「天神産紙工場」（現内子町五十崎）などが、かじやミツマタを原料に、手すきの大洲和紙として伝承している。



## 【大洲農業高等学校生活科学科被服班のみなさんからのメッセージ】

今回、私たちは「大洲和紙」に光を通すと、柔らかくあたたかい光になることに着目して、ランプを製作しました。肱川の夜空に飛び交うホタルや秋桜の風景を表現し、大洲らしさを演出しました。今後も、大洲の季節に応じたテーマで、ランプを製作したいと考えています。

また、授業で培った被服製作の技術を生かして、大洲和紙を用いたウエディングドレスやカクテルドレス、打ち掛けなどを製作し、農業祭で発表しました。和紙とは思えないほどのしなやかさや鮮やかな色合い、また、和紙の優しい風合いに、訪れたみなさんから高い評価をいただきました。

これからも、大洲の観光資源の普及や伝統産業の継承・復活を願って、大洲和紙の製品化に向けた活動を実践していきたいと思っています。



大洲農業高等学校3年  
三好亜惟さん

大洲和紙に注目したきっかけは、国の伝統的工艺品に指定されているにもかかわらず、その知名度が低いことからでした。五十崎の和紙製造工場で見せていただいた職人技や和紙製品に感動し、ぜひ私も製作したいと思いました。

実際に、和紙をすく体験をしましたが、破れやすく、想像以上に力仕事で難しかったです。

今回、私たちは製作したランプをおはなはん通りの休憩所に設置したり、市内の老人保健施設に寄贈したりしました。私たちが丁寧に、和紙の良さを最大限に引き出した作品を、たくさんの人に見ていただきたいです。

今後は、実際に自分たちですいた和紙製品で、大洲和紙を復活させたいです。また、後輩たちには、私たちの経験を生かしてもらいたいです。



大洲農業高等学校3年  
榎田夏生さん

私は高校の授業を通して、初めて大洲和紙の存在を知りました。

大洲和紙の歴史や現状について勉強していくうちに、和紙の温かさやその奥深い魅力を発見することができました。

一見紙である和紙の強度は、弱そうだと思われがちですが、布と同じようにミシンをかけることができます。

初めてのドレス製作では、作業の行き詰まるどころが多々ありましたが、自分でデザインを考え、それを基に完成した作品を見た時は、作る喜びと達成感でいっぱいでした。

和紙は、普段の私生活でもいろいろと活用することができます。今後、高校生ならではのアイデアを生かして、大洲和紙の魅力や活用方法を多くの人に広めていきたいです。



今回の取材では、「ものづくり」に真剣に向き合う人たちの情熱や発想、そしてたゆまぬ努力を肌で感じました。

卓越した技術は、日々の惜しまぬ努力によって磨かれたものであり、一朝一夕に習得できるものではありません。並々ならぬ努力の蓄積が、伝統的な「もの」を生み出します。

また、匠の技によって手間暇かけて作られた「もの」には、機械で大量生産された「もの」とは違い、作り手の温もりや気持ちが伝わってきます。

大洲の「ものづくり」は、大洲の文化そのものです。後継者不足が大きな課題となる中、大洲農業高等学校生活科学科被服班の大洲和紙復活に向けた取り組みには、「ものづくり」を継承する上で、大きな意義があります。

今後、大洲のさまざまな「ものづくり」が廃れることなく、次世代に継承されていくことを祈ります。

大洲の文化を守り、伝えるために。